

日本の学校教育における鍵盤ハーモニカの導入

The Introduction of the Blow-organ into the School Education in Japan

山中 和佳子

Wakako YAMANAKA

音楽教育講座

(平成27年9月30日受理)

1. はじめに

日本の音楽科教育において「器楽」領域の学習が必須となってから、現在まで様々な楽器が学校教育に導入されてきた。現在小学校の音楽科教育の中で、器楽学習の中心的な楽器となっているものは、鍵盤ハーモニカとリコーダーであるだろう。現在の小学校の器楽領域では、1年生から鍵盤ハーモニカの学習を始め、3年生で新しくリコーダーの学習を始める流れが主流になっている。鍵盤ハーモニカの元になった楽器は、ヨーロッパで製作された楽器であるが、日本では主に学校音楽教育で活用される楽器として周知されている。それでは、日本の音楽科教育はこの鍵盤ハーモニカを学習教材として活用することによって、子どもたちの何を育てようとしてきたのだろうか。鍵盤ハーモニカを用いた音楽活動では何が目指され、どのような意味づけが意識的・無意識的になされてきたのかについて、学校音楽教育への導入の過程と現状から解明することにより、従来から指摘されてきた、楽器の指導が単純作業的な技能指導に陥る可能性があるという課題の解決や、子どもたちが楽器に向き合う面白さや奥深さを学ぶことのできる授業を行うための視座を提供することができると考えられる。

以上の課題意識から、本研究では、日本の学校教育における鍵盤ハーモニカの導入の過程に焦点を当て、1960年代及び1970年代における鍵盤ハーモニカ指導の特質と役割を明らかにする。そのために、主に音楽教育に関連する雑誌と教科書を含む書籍の文書資料の分析を通して、①楽器産業による楽器の開発、②学校教育への導入の様相の2つの側面から検討を行う。

2. 楽器産業による鍵盤ハーモニカの開発と楽器の特徴

(1) ヨーロッパにおけるハーモニカと鍵盤ハーモニカの製造

日本の鍵盤ハーモニカの普及の背景には、ドイツの「ホーナー社」の存在がある。ホーナー社は、1800年代からハーモニカやアコーディオンといった「リード楽器」を製造しており¹、日本はハーモニカを1891年ごろホーナー社から輸入し始めた。その後第1次世界大戦ごろからは、国内の真野商会（のちの大正9年にトンボハーモニカ製作所と改称）や、日本楽器製造株式会社（蝶印ハーモニカ：バッテリーフライハーモニカ）によって、生産が開始されるようになった²。これによって、戦前からプロの演奏家が生まれたり、家庭で演奏を楽しんだり、学校教育の中で児童が演奏する楽器として、ハーモニカは広く普及した。特に昭和前期には、学校によっては唱歌会などの学校行事で児童によるハーモニカの合奏が行われたり、先駆的な教師によってハーモニカを取り入れた器楽指導がおこなわれたりした³。

戦後になると、さらにハーモニカは器楽教育の中心的な楽器として学校現場に導入され、特に昭和30年代の日本の音楽科教育で、ハーモニカが合奏の中心的な楽器となっていた。ところが昭和40年代後半になると、鍵盤ハーモニカがハーモニカに代わって導入されるようになった。この経緯については、後述する。

ホーナー社が製造していた鍵盤ハーモニカに類似した楽器「メロディカ」が、日本で知られるようになったのは、1959年以降である。日本ではこの年の3月に出版された娯楽雑誌に「新楽器メロディカ 穴の代わりにピアノのようなキイを使った新しいフルート風の楽器メロディカが、このほど西独のミュニーヒでお目見得した」と写真入りでホーナー社の「メロディカ」が紹介されている⁴。この記事は、日本に輸入される前の情報であり、メロディカの日本での最初の紹介だと思われる。

ホーナー社製の楽器輸入に関しては「東京アコーディオン・ディベラップメントセンター」が中心となっており、メロディカはこの会社の働きによって1960（昭和35）年初頭から日本で発売され始めた⁵。さらに同年、この会社の働きかけで東京と大阪の5つの会社がホーナー社製楽器の特約店となっており⁶、昭和30年代半ばには、日本でのリード楽器販売が促進された。メロディカの輸入と同時期に、東京アコーディオン・ディベラップメントセンターは「クラビエッタ」という楽器を輸入している。この楽器は、フランスのBeuscher社で製造販売され、その後イタリアでも製造販売されるようになった楽器である⁷。

これら2つの楽器の特徴を見てみたい。各楽器の小売価格は、クラビエッタ17,800円、メロディカ5,000円で非常に高価であった。メロディカ（ソプラノ）は、吐く息で発音され25鍵（C'～C''の2オクターブ）の「ボタン式」で半音を出せる楽器である（写真1）。本体の真ん中から両脇にゆるく逆Uの字型に傾斜しており、吹き口は、本体上部の真ん中にまっすぐつけられている。リコーダーのように裏側を両手の親指で支えながら、両手の親指以外で演奏するように意図されている（写真2）。

クラビエッタは、吐く息によって発音され34鍵（G～E''）で半音を出せる楽器である（写真3）。オルガンやピアノの鍵盤と同様であり、左手で本体を支えながら右手で演奏するようになっていた。吹き口は、右手で演奏しやすいように本体上部の右寄りに斜めにつけられている。

(2) 日本における鍵盤ハーモニカの開発

日本でメロディカが紹介されてから2年後の1961年半ばには、スズキ楽器製作所が「メロディカ」に非常によく似た「メロディオン」を製造し、「レジャーを楽しむインスタント楽器」⁸「リード合奏、鼓笛バンドに最適な楽器」⁹として発売を開始した。メロディオンは、25鍵で音域が（F'～F''の2オクターブ）である。この価格はメロディカよりは安く2500円であった¹⁰。また、1961年末にはトンボ楽器製作所からクラビエッタに似た「トンボ・ピアノ・ホーン」が、「学童はもとより、家庭団らん用として楽しめる楽器」として新発売された¹¹。この楽器は25鍵（F'～F''の2オクターブ）で価格は3500円であった。さらに同時期に、東海楽器製造株式会社から「ピアニカ」が新発売された。「ピアニカ」は、トンボ・ピアノ・ホーンやメロディカより鍵盤数が多く32鍵（G～D''）で、価格は3500円であった¹²。また、ボタン式のメロディオンを製造していたスズキ楽器が、1962年には「メロディオン スーパー34」という鍵盤式で34鍵の鍵盤ハーモニカの販売を始めた¹³。

発売当初は、これらの楽器の吹き口は1種類であり、吹き口が短く本体に近い構造になっていたが、1963年半ばになると3種類の吹き口を付け



【写真1】ドイツのホーナー社で製造されていた「メロディカ」と収納ケース（筆者私物リペア済み）



【写真2】1959年3月号の『トルー・ストーリー』p.121より。



【写真3】1960年2月号『楽器商報』のp.49に掲載された広告記事より。

替えることができる新型が発売された。1963年のスズキのメロディオンには、従来の直接本体につなげる短めのプラスチックの吹き口と、長さが20センチほどのホースが付いた吹き口、そして現在の鍵盤ハーモニカと同じような長さのホースの先につけられた吹き口が付属されるようになった¹⁴。この吹き口の発売によって、「卓上でピアノオルガンと同じように両手で弾ける」¹⁵ことのほか、卓上に本体を置いて運指を見ながら演奏できるという利点が生まれたのである。

さらに、スズキ楽器からは1969年に「メロディオンスタディ 25」が1980円で発売され、より安価な楽器が教育現場に提供されるようになった。この楽器は、リードの耐久性を向上させながら、学校の教師でも修理できるように修理方法が工夫された楽器であった¹⁶。

このように、1960年代には、鍵盤ハーモニカの製造開始から各楽器会社がしのぎを削って構造や価格、堅牢性といった点で楽器の改良を加え、この楽器の学校教育への導入を促進したのである。

3. 学校教育への導入の様相

(1) 音楽教育雑誌に見る鍵盤ハーモニカの特徴に関する教師の見解

音楽教育雑誌に鍵盤ハーモニカに関する情報が初めて掲載されたのは、1960年5月の『器楽教育』「教育音楽界ニュース」p.35であるだろう¹⁷。鍵盤ハーモニカの指導に関しては、その後1962年7月号『器楽教育』に登場し、さらに同年9月号では、この楽器を演奏している子どもたちの写真が『器楽教育』の表紙を飾った。1960年代初頭に掲載されたこれらの記事では、名称が定まっておらず、「有鍵ハーモニカ」や「鍵盤ハーモニカ」と呼ばれていた。

1960年代の鍵盤ハーモニカに関する音楽教育雑誌記事では、オルガンやハーモニカ指導の問題点を挙げながら、鍵盤ハーモニカの価値を探る内容のものがしばしば見られた。オルガン指導については、予算の関係でオルガンの台数が少ないという問題が挙げられている。そして、この問題に対処するために行われていた紙鍵盤を使った指導に対しては、「やっぱり絵に書いたものより、子どもたちはたとえ小さな形のもので実際のものを与えるということでピンときますからね」という教師の意見が見られた¹⁸。この言葉からは、数を揃えられる可能性のある鍵盤ハーモニカの有効性への期待がうかがえる。

ハーモニカについては教育的効果が認識されていた一方で、指導上の問題について教師から次のような見解が示された。

- ・吹音・吸音の呼吸上のコントロールが困難。出そうとする音を眼や手で確かめられない。跳躍音が演奏しにくい¹⁹。
- ・どんな調でも演奏する訳にはいかない。和音が出来ない²⁰。
- ・ハーモニカは大勢で吹いていると流れがスムーズにいくので、ついごまかされている²¹。
- ・クレシェンド、デクレシェンド奏やタンギング等の相当な技術を要する²²。

このハーモニカに対する問題点の背景には、楽器の構造上の特徴がある。ハーモニカ、オルガンや鍵盤ハーモニカは、発音体にリード（簧（した）あるいは舌）を用いた楽器であり、発音原理が同じである。学校教育においては、これらの楽器は「リード楽器」と総称されている。リード楽器は音に合わせてリードの長さが決まっており、高音になるにつれてリードの長さは短くなる。音程がほぼ固定されているため、「空気」＝「息」の強さによって音程がそれほど左右されることはなく、空気の量を増減させることで音量の変化を付けることができることが特徴である。

ハーモニカには、各音に対して吹き口の孔が1つずつ横一列に並んでおり、この各孔に対応するように、楽器内部には発音体である薄い金属片（＝リード）が設置されている。リードは吹き入れる空気振動して発音される向きと、吸い込まれる空気振動して発音される向きに互い違いに設置されているため、ハーモニカは、ドの音は吹いてレの音は吸うというように、吹いたり吸ったりして演奏する。この構造によって本体が小さくても音域を広くできる上、小型で持ち運びには便利である。他方、吹き口が小さいため出した音だけを鳴らすことが難しいという特性がある。それゆえ、上記に示したように、出そうとする音を眼で確かめられないことや、跳躍音が演奏しにくい、あるいは和音の演奏がしにくいという問題点が指摘されたのである。

鍵盤ハーモニカの最大の特徴は、鍵盤がありながら息を使って発音することである。各鍵盤（音）に対し

てリードが楽器内部に設置されている。演奏者は鍵盤ハーモニカに息＝空気を流し込み、同時に鍵盤を押すことによって息の通り道ができ、通ってきた息によってリードが振動して音が鳴るといった構造になっている。そのため、鍵盤ハーモニカで音を区切る方法には、①ピアノと同様に鍵盤を指で押したり離したりして行う、②指であらかじめ鍵盤を押さえておき、リコーダー（吹奏楽器）のように息を吹き込みつつ舌を操作して音を区切る＝タンギングする、③さらにこれら2つを合体させて区切るという3つの奏法があり、それぞれの奏法が生み出す音楽表現上の効果は異なっている。

それでは、鍵盤ハーモニカについては、どのような特徴が認識されていたのか。1963年11月号の『器楽教育』及び、1968年の『教育音楽』には、鍵盤ハーモニカについて開かれた座談会の記事が掲載されている。そこには、以下のような小学校教諭たちの見解が見られた。

・千代延尚：音色が非常におもしろいと思います。それから、ハーモニカでは、クレシェンド、ディクレシェンドがむずかしいんですが、そういう点ではメロディオンやピアノは非常に楽に表現できる。それに、飛ぶ音がハーモニカではむずかしいが、この楽器は楽にできますね。

朝生朝正：個人持ちになるという状態、これはなかなか無理でしょうね。そういう有鍵盤ハーモニカを使った授業というので、頭にすぐ浮かんでくるのは、いわゆる普通の時に、オルガンの音階の指導、そういうことをやる時に、一々オルガンとかピアノを見せて、鍵盤の状態を教える。そういうことでは非常に手数がかかるが、こういったものと、ちょっと持って見せたりすることができる（後略）²³

・飯田秀一：鍵盤ハーモニカの場合は、押せばすぐ音が出てくる。しかもその音を眼で確かめられるという利点がある。（中略）うちへ持って行って手軽に練習できるということも利点でしょう。（中略）笛と同じようにタンギングも指導できる。（中略）

酒井知照：笛を指導する前に——現行だと四年生から笛ですから三年生で——鍵盤ハーモニカを扱いますと、非常に楽ということですね。指を縦に動かす運動ですから、指そのものに巧緻性が出てくるということ、それからあのタンギングが捨てられないですね²⁴。

これらの言葉には、音量のコントロールや跳躍の演奏が可能であることその他に、鍵盤楽器としての学習内容の可能性が指摘されている。また、タンギング奏法による演奏表現の広がりがあり、リコーダーの学習とのつながりを持たせることができるということ、そして、ハーモニカやリコーダーと同じく携帯できるという点が、鍵盤ハーモニカの価値としてとらえられていたことがわかる。

これらの座談会以外にも、「笛におけるピッチの調整の悩みもこれがリード楽器であるために解消してくれる」²⁵ことや、「何と云っても鍵盤があり、出す音を眼と指で確かめられることは、教育上非常に有利なことと思う。予算の少ない学校ではデスクオルガンの代わりに備えたらずいぶん役に立つことと思う」²⁶という教師の見解が見られた。鍵盤ハーモニカの特性である固定されたピッチや、鍵盤操作を眼で確認できること、予算的に鍵盤楽器であるオルガンを揃えるよりも安価である、といった長所が学校現場への鍵盤ハーモニカの導入を促進する背景にあったと考えられる。

とはいえ、鍵盤ハーモニカには、学校教育への導入にあたっての問題があった。1つ目は、価格の問題である。例えば、メロディオンは当時2500円でオルガンよりは安価ではあるものの、それまで個人持ちとされていたハーモニカはシングル（幹音のみ）ソプラノが380円であった。そのため、教師からは「安くて間に合わせようとすればハーモニカにしちゃうし、もう少し高くてもいいという人ならオルガンに」するといった心情が述べられており、台数を揃えるためには1000円程度の価格での販売を望む声が挙げられていた²⁷。

2つ目は、しばしば学校で使用する教具に望むこととして指摘される、堅牢性の問題である。上述した1963年の座談会では、故障によって鍵盤が動かなくなることや、ピッチがくってしまうこと等の問題が指摘された。この座談会のほかにも、リードが腐蝕してしまうこと、アコーディオンやハーモニカのように自分たちで修理することができず、修理にも費用や時間がかかってしまうといった²⁸状況が挙げられている。従って、1960年代前半は、楽器が壊れても、台数が少なくても他の楽器でカバーできるクラブ活動や鼓笛バンドの合奏への導入が主であり、ハーモニカのように個人持ちをして器楽指導の中心的楽器とした学校はまだ少なかった²⁹。

しかし、1970年代に入ると「ハーモニカの代用楽器として、これを1学級分備品として購入し、歌口だけ個人持ちさせ一斉指導で取り扱う学校や、ハーモニカを持たせることをやめて、これを低学年から個人持

ちにさせる学校も多くなって」³⁰おり、1965年に比べて3倍の普及率を示し「教育楽器として驚異的な普及率は、おそらく他に類をみない」ほどであったという³¹。この普及の背景には、前述した楽器産業における構造や価格、堅牢性の改良という点のほかに、学習指導要領音楽編の内容の改訂があると思われる。1968年の改訂では、新たにリズム、旋律、和声のほか音符や記号の理解という4つの内容を含む「基礎」という領域が設けられた。当時文部省教科調査官だった真篠将は、鍵盤ハーモニカは、吐く息によってフレージングの表現を工夫できることや、鍵盤によって和声や音階について目で確かめながら指導ができるという点から、「基礎」領域の学習に活用できる楽器としての有効性を指摘している³²。従って、楽器の性能の向上と学習指導要領の指導内容に対応できる楽器固有の特性が、1970年代の鍵盤ハーモニカの音楽科教育への導入を促したと推測できる。

(2) 学習指導要領の内容

次に、学習指導要領における鍵盤ハーモニカに関する内容を見てみたい。学校教育に鍵盤ハーモニカの導入が試みられるようになってから初めて改訂された1968（昭和43）年の内容には、学習指導要領音楽編及びその指導書にも鍵盤ハーモニカの名前は見られない³³。しかし、1967年に第4次指導要領に即して設定された教材基準には、学校の備品として「鍵盤ハーモニカ」を学校規模に合わせて2台から4台保有しておくことが示されている³⁴。

1977（昭和52）年告示の学習指導要領では、指定楽器として「ハーモニカ」が指定されているものの、「指導計画の作成と各学年にわたる内容の取扱い」を見ると、「第1学年及び第2学年のハーモニカ並びに第2学年のオルガンについては、学校の実情に応じて、他の同種の楽器に代替することができること」が示されている³⁵。さらに、この学習指導要領に対応した文部省発行の指導書には、「旋律楽器には、ハーモニカや笛をはじめとして、鍵盤ハーモニカ、オルガン、アコーディオンなどの鍵盤楽器、また、電子楽器、管楽器、弦楽器などがある」という文言が示されており、ハーモニカの代替楽器として真っ先に鍵盤ハーモニカが挙げられている。そして、鍵盤ハーモニカに代替したときの利点として以下のことが示されている³⁶。

まずハーモニカの代替楽器としては鍵盤ハーモニカをあげることができる。ハーモニカも鍵盤ハーモニカも、共にリードを発音源とする楽器であり、息で演奏するという奏法上の共通点もあるからである。ハーモニカを鍵盤ハーモニカに代替したときの利点は、鍵盤を通して視聴一体の基礎指導ができることや、レガート奏やタンギング奏が容易にでき、かつ音量の豊かさを求めることが出来る点などが主なものである。次に、オルガンの代替楽器としては、当然、鍵盤を有する楽器ということになる。

1977年の学習指導要領指導書では、吹奏楽器として、また鍵盤楽器としての鍵盤ハーモニカの有用性が明確に示されるようになった。これらのことから、1960年代前半からの鍵盤ハーモニカの学校教育への導入は、1960年代後半以降に推進され、1970年代半ばに入るとオルガンとハーモニカの代替楽器として有効であるとの考えが認識されるようになったことがわかる。

(3) 教科書と教師用指導書に見る鍵盤ハーモニカの指導内容

現在使用されている教育出版と教育芸術社の2社の内容から、鍵盤ハーモニカの指導の特質を検討する。楽器の製造は1961年から始まっていたが、教科書に鍵盤ハーモニカについての言及が見られるようになったのは、1968年に告示された学習指導要領に対応した1970（昭和45）年の教科書からである。教育出版と教育芸術社の2社を比較すると、鍵盤ハーモニカの指導内容の掲載は圧倒的に教育出版の方が多³⁷。そこで、本項では主に教育出版の内容に着目する。

現在の教科書では、鍵盤ハーモニカの指導は第1学年から始まる構成になっているが、1970年の教育出版の教科書では第4学年に鍵盤ハーモニカの指導内容が掲載されている³⁸。とはいえ、4年生までにオルガン、ハーモニカ、リコーダーの学習をしているため、鍵盤や詳しい運指についての学習内容は掲載されていない。その中で、同音の連打については、指導書に「けんばんを打ち直さず、タンギングでリズムを作る」という文言が見られ、オルガンやハーモニカにはない鍵盤ハーモニカならではの新しい演奏法の学習が提示されている。他方、このタンギングについては同指導書の「けんばんハーモニカの練習」というページの中に、次のように留意が促されている³⁹。

同音の時は、鍵盤を押したままタンギングでリズムがとれるが、初歩の段階では、オルガンと同じようにタッチをして指導したほうがよい。慣れてくれば和音奏やダブルタンギング、トレモロ奏（舌を口の中で左右に早く動かす）なども容易で楽しい演奏ができる。

このように、既習であるオルガン演奏法で教材を学習した後、吹奏楽器の身体操作であるタンギングの練習を行うことが示唆されている。「音を区切る」学習においては、低学年のオルガンの学習と3年生からのリコーダーの学習を応用させていることがわかる。

ところが、1976（昭和51）年に出版された教育出版の教科書では、この鍵盤ハーモニカのタンギングについて、新たな視点が提示された。1976年版は、実際に教科書に学習内容が載せられるのは2年生からであるが、1年生の指導書から10ページ以上を割いて鍵盤ハーモニカの「楽器の特長と奏法の基本」と「参考資料」が掲載されている。その中で、鍵盤を持ちリードを発音体とする鍵盤ハーモニカと、アコーディオン、オルガンの3種類が比較されている。それを踏まえて、鍵盤ハーモニカのタンギングにおける音楽表現上の特徴が、次のように指摘されている⁴⁰。



【楽譜1 教育出版（1976）1学年指導書 p.198 より】

この旋律（注：楽譜1）の表情を「オルガン」で表現することはできない。fも>も不可能であり、音が引き立たないので行進曲のファンファーレのはざれよい堂々たる曲想の表現は望むべくもない。「アコーディオン」では、この旋律のfや>は表現できるが、同じ高さの音が連続しているこのリズム形は、「アコーディオン」にとってはそうやさしいものではない。（中略）これ以上のテンポになると、同音の連続は「アコーディオン」では不可能に近いものとなる。

ところが、「けん盤ハーモニカ」にとっては、この旋律はむしろむずかしいどころか、むしろ最も得意とするものになってしまうのである。（中略）

また、曲の最初の出だしや休符のあとの出だしなどは、〈けん盤〉を押しておいてからタンギングで発音させるとタイミングのずれがなく、正しいリズムを表現することができる。

オルガンやアコーディオンでは、同音連打やそれにアクセントがついているようなフレーズを演奏する際、楽器の特性上表現しにくく、結果として歯切れが悪くなり重さが残ってしまう。その上、指の動きで音を区切るため、同音連打の奏法はかなり高度である。他方、鍵盤ハーモニカでは、リコーダーのように運指は変えないまま、タンギングによって同音連打やアクセントが容易に表現できるのである。これをうけて参考資料のページでは、鍵盤ハーモニカのタンギング指導に重点が置かれ、細かな運指の指導よりも先にロングトーンでタンギングの練習をさせる指導内容が詳しく掲載されている。

この指導書の「楽器の特長と奏法の基本」と「参考資料」ページには、鍵盤ハーモニカに対して「代替楽器」という言葉は使用されていない。1960年代、ハーモニカや鍵盤楽器（オルガン）の代替楽器としてとらえられていた鍵盤ハーモニカに対して、1976年版の教科書の指導書では吹奏楽器と鍵盤楽器としての固有の長所が明確に前面に出されている。指導者に鍵盤ハーモニカ独自の面白さを把握させ、音楽表現の創意工夫の手立てとなる奏法を、低学年の段階から習得させる構成へと変化したことが見て取れる。その後、1977年の学習指導要領に対応した教科書においても、同様の内容が引き続き掲載されている。

4. おわりに

ヨーロッパの楽器を手本として、1960年代に日本で鍵盤ハーモニカが製造され始めてから、その後10年間、楽器会社は学校教育への導入と販売促進を目指して、教育現場からの要望に応えるべく構造や吹き口の新しいアイデアによる開発、価格や堅牢性の向上などの改良を行った。これらの重ねられた楽器改良に後

押しされながら、日本の学校現場では1960年代半ばから1970年代前半にかけて、鼓笛バンドなどのクラブ活動のみならず音楽科授業への鍵盤ハーモニカの導入が試みられるようになり、1970年代半ばには教科書の指導書に鍵盤ハーモニカの指導のポイントが詳細に掲載されるようになった。現在まで続く鍵盤ハーモニカの指導の基礎は、1970年代に作られたといえるだろう。

この時期における鍵盤ハーモニカは、ハーモニカやオルガンの「代替楽器」という役目を負っていた。とはいえ、ただ単に代替楽器という価値の範囲にとどまらず、当時の教師たちによって、息を使うことによるフレーズ感の習得、管楽器に通じるタンギングなどの演奏表現の習得、鍵盤を用いることによる音階や和音の理解、指を動かすことによる運指の習得といった、鍵盤ハーモニカならではの音楽教育的役割がとらえられていた。また、学習指導要領の改訂による「基礎」領域を支える楽器としても、その価値が見出されていた。鍵盤ハーモニカは、吹奏楽器と鍵盤楽器の両側面の特長を備えていることにより、ハーモニカやオルガンとは異なる新たな音楽教育的な価値を持った楽器として認識されるようになったのである。

楽器には、固有の構造や発音原理があるため、演奏時にはその楽器固有の様々な身体感覚や身体操作が必要とされる。言い換えれば、楽器から音を生み出す行為は「身体という道具の使い方そのものを「知る」⁴¹」⁴¹ ことにも繋がるのである。演奏者は、楽器の固有性に合わせて身体を注意深くコントロールすることで、楽器からより多彩な表現を生み出すことができる。学習楽器の教育的な価値や役割は、指導者が楽器の特徴を深く把握することによって理解することができるのであり、この深い理解が子どもたちの身体を通じた音楽経験の内容を深める重要な手がかりとなるのである。

【付記】本研究は、平成26年度福岡教育大学研究推進支援プロジェクト経費の助成を受けたものである。

【注と参考文献】

- ¹ 檜山陸郎 (1977) 『楽器業界』 教育社 pp.80-81。
- ² 西宮森太郎 (1960.6) 「ハモニカ・あんこおる = 演奏会を通じた“人”と“動き”の年表」 『楽器商報』 pp.42-43。
- ³ 本多佐保美他 (2015) 『戦時下の子ども・音楽・学校——国民学校の音楽教育』 開成出版。
- ⁴ 執筆者不明 (1959.3) 「新楽器メロディカ」 『トルー・ストーリィ』 11巻3号, p.121。
- ⁵ 執筆者不明 (1960.1) 「クラビエッタ、メロディカの性能と使用範囲 東京アコでの研究結果」 『楽器商報』 pp.109-110。メロディカにはアルトとソプラノがあり、1961年末にはアルトも輸入販売されるようになっている (広告記事 (1961.12) 『楽器商報』 p.146)。ソプラノは後述の通りC' ~ C''' の音域であり、アルトはF ~ F'' である。
- ⁶ 執筆者不明 (1961.5) 「ホーナー製品の日本 総発売元契約を結ぶ 東京アコーディオン」 『楽器商報』 p.50。
- ⁷ 桜井徳二 (1962.2) 「クラビエッタの周辺」 『楽器商報』 p.45。
- ⁸ 同楽器が全音楽譜出版社からも発売されている。(1961.8) 「メロディオン広告」 『楽器商報』 p.65。
- ⁹ 執筆者不明 (1961.7) 「メロディオンなど4種 全音の新しい発売品」 『楽器商報』 p.52。
- ¹⁰ メロディカ系の楽器は「パテントの問題が起きて、この楽器は市場から消え失せてしまった」という (執筆者不明 (1969.5) 「MUSIC TRADE CLINIC 楽器販売に関する臨床講義—その26—ハーモニカと鍵盤ハーモニカ」 『楽器商報』 p.91)。1960年代後半 (昭和40年代以降) の雑誌記事には、国産のボタン式の鍵盤ハーモニカに関する内容は見当たらなかった。
- ¹¹ 執筆者不明 (1961.11) 「トンボ・ピアノ・ホーン トンボ楽器の新しい製品」 『楽器商報』 p.47。
- ¹² 東海楽器ピアニカ (1962.4) 「広告」 『器楽教育』 裏表紙。
- ¹³ 執筆者不明 (1962.4) 「スーパー・メロディオン 全音楽譜」 『楽器商報』 p.76。この広告が『楽器商報』の1962年5月号 p.61, 及び7月号 p.109に掲載されている。
- ¹⁴ スズキ楽器製作所 (1963.5) 「メロディオン広告」 『楽器商報』 p.57。
- ¹⁵ 同前。
- ¹⁶ 執筆者不明 (1969.7) 「千9百80円という安さ メロディオンスタディ 50」 『楽器商報』 p.114。
- ¹⁷ この記事は、「新しい楽器『メロディカ』 西ドイツのホーナー社から輸入された新しい楽器『メロディカ』

が、東京アコーディオンから発売されました。これは笛の形をしていて、半音付きの鍵盤が二オクターブあり、リードによる発音体からできている。音色は木管楽器のクラリネットに近い感じのものである。操作が簡便で器楽教育の発達と共に注目されよう」といったメロディカを紹介したものであった。

- ¹⁸ 朝生朝正, 川井勇他 (1963.11) 「座談会 有鍵ハーモニカの長・短所をさぐる」『器楽教育』 p.20。
- ¹⁹ 石崎努 (1962.7) 「特集 指導要領に示されていない特殊な楽器の活用とその可能性」 pp.8-14 より 《有鍵ハーモニカ》『器楽教育』 pp.10-12。次の2つの簡条書き内容についても同資料。
- ²⁰ 当時から、ハーモニカには「吹き吸い」の配列にラとシを続けて吸うように配列されている「標準配列」と、楽器の一番端から端まで交互に吹き吸いする配列になっている「自然配列」の2種類があった。また、半音が出せるクロマチックハーモニカ、あるいは幹音のみのハーモニカ、各音に配列されたリードの枚数が異なる単音ハーモニカ・複音ハーモニカなど、様々な種類が製造されていた。そのため、学校や教師によって器楽学習で用いるハーモニカが異なっていた。
- ²¹ 真篠将他 (1968.12) 「座談会 鍵盤ハーモニカ〈その効用と価値をさぐる〉」『教育音楽』 23 卷 12 号, pp.44-48。
- ²² 千代延尚 (1963.6) 「有鍵ハーモニカ」『教育音楽』 pp.44-47。
- ²³ 朝生朝正他 (1963.11) 「座談会 有鍵ハーモニカの長・短所をさぐる」『器楽教育』 p. 20。
- ²⁴ 真篠将他 (1968.12) 「座談会 鍵盤ハーモニカ〈その効用と価値をさぐる〉」『教育音楽』 23 卷 12 号, pp.44-48。
- ²⁵ 千代延尚 (1963.6) 「有鍵ハーモニカ」『教育音楽』 pp.44。
- ²⁶ 石崎努 (1962.7) 「特集 指導要領に示されていない特殊な楽器の活用とその可能性」 pp.8-14 より 《有鍵ハーモニカ》『器楽教育』 pp.10-12。
- ²⁷ 朝生朝正他 (1963.11) 「座談会 有鍵ハーモニカの長・短所をさぐる」『器楽教育』 p. 20。
- ²⁸ 千代延尚 (1963.6) 「有鍵ハーモニカ」『教育音楽』 p.47。
- ²⁹ 導入に関しては、小学校だけでなく中学校でのクラブ活動でも使用していた様子が見られた (1962 年 10 月号『器楽教育』には、福島県の中学校のリード合奏団の写真が掲載されている)。
- ³⁰ 教育出版 (1970) 『新版標準音楽 4 年教師用指導書』 p.103。
- ³¹ 佐々木 (名前不明) (1971.3) 「新学期をねらう教育用楽器」『楽器商報』 p.28。
- ³² 真篠将他 (1968.12) 「座談会 鍵盤ハーモニカ〈その効用と価値をさぐる〉」『教育音楽』 23 卷 12 号, p.46。
- ³³ 文部省 (1969) 『小学校指導書 音楽編』東洋館出版社。
- ³⁴ 文部省 (1967.9) 「教材基準の解説 (小・中学校) 資料 教材基準 (小・中学校)」『教育委員会月報』 205 号, pp.136-150。
- ³⁵ 国立教育研究所 H P の学習指導要領データベースを参照。
(<http://www.nier.go.jp/guideline/s52e/chap2-5.htm>) 最終閲覧日 2015 年 9 月 29 日。
- ³⁶ 文部省 (1977) 『小学校指導書 音楽編』 pp.88-89。
- ³⁷ 教育芸術社及び教育出版の 1964 年版, 1970 年版, 1976 年版, 1979 年版の, 全学年の音楽科教科書と指導書を対象に調査した。
- ³⁸ 教育出版 (1970) 『新版標準音楽 4 年』 p.27。
- ³⁹ 教育出版 (1970) 『新版標準音楽 4 年教師用指導書』 p.103。
- ⁴⁰ 教育出版 (1976) 『新版音楽 1 年 教師用指導書』 p.198, p.200。
- ⁴¹ 佐伯胖ほか (2013) 『新装版 アクティブ・マインド: 人間は動きのなかで考える』東京大学出版会, p.19。